

## 新約聖書ギリシア語における Infinitive 構文 (注1)

近 松 明 彦

### 0. 序

#### 0.1. 目的

本稿は、新約ギリシア語における Infinitive 構文、即ち、述部に動詞の Inf. が項として生起する構文の統語論的記述を目的とする。その際、従来、Acc. cum Inf. として記述されてきた構文の対格形の項の統語論的役割が明らかになるよう工夫したいと思う。

#### 0.2. 問題の所在

従来の研究では Acc. cum Inf. の対格形の句の統語的役割が十分に分析されていない。例えば、古典ギリシア語の代表的文典である Smyth (1956) には次の様な記述が見られる。目的語として Inf. を取る意志・願望の動詞は Inf. 以外に今一つの目的語を取る事が可能であるという (Smyth (1956): 1992. a.)。ここで、Smyth によると、例えば *ethélo: (thélo:)* (wish, will) の様な動詞が、Inf. 以外に対格の目的語を取る動詞のクラスに属している事になっている。それに対し、筆者は次の根拠から、この対格形の名詞句を主文の目的語であるというより、Inf. の主語であるとすべきだと考える。*thélo:* は次の様に目的語の位置に Inf. の補文の代りに、対格形の名詞的要素を取る事が可能である (Bauer (1971) 参照)。

(1) ou *tí egò: thélo:* allà *tí sú.* (Mark, 14.36.)

「私が、欲することではなく、あなたが(欲する)こと(を)。」(註2)

(1) から明らかなように、動詞 *thélo:* は元来、二項動詞であり、二重対格を支配する事はないと考えるべきである。従って、*thélo:* の目的語の位置に Inf. が生起する場合には、その Inf. 以外には何ら目的語も存在しないと考えるべきである。Smyth の言う二つの目的語とは、実は一つの目的語の位置に生起する Inf. とその対格形の主語であると私は考える。次の文を御覧頂きたい。

(2) Kai eiselthò:n eis oikian oudéna é:thelen gnōnai, ...

(Mark 7.24.)

「そして、家に入って行った時、(彼は)誰にも知って欲しくなかった・・・」

上述の我々の考えに従えば、(2)のInf.は目的語と言えるが、対格形の名詞句は主動詞の目的語でなく、Inf.の主語であると考えねばならない。この様に従来の研究では所謂Acc. cum Inf.の対格の句の統語的役割に関して問題を含んでいると考える。

次の様な事例を考えよう。anagkázō:(to force)は(3)の様な構文を取る。

(3) Kai euthūs e:nágkassen tous mathe:tàs autoū embē:nai  
eis tò ploïon kai proágein eis tò pérán pròs Be:thsaídán,  
... (Mark, 6.45.)

「そして、すぐに(彼は)自分の弟子達にその舟に乗り込んで、対岸のベツサイダに  
先に行くよう強いた。」

即ち、この動詞は主文の対格形の名詞句とInf.とを取る。この対格形の名詞句は、先の  
thélo:と異なり、主文の目的語であると筆者は考えたい。この判断は次の根拠に基づく。

Liddell & Scott(1983)によると、anagkázō:には“to force a person to do a  
thing”の意味で、二重対格を取る用法があるという。Liddell & Scott(1968)は(古典期  
の作品からの用例ではあるが)次の文をあげている。

(4) tò sundrō:n s' anagkásei khréos (E. Andr.337)

「世間(共に為すもの)はあなたに義理を強しよう」

この事から、anagkázō:が、原則的に二つの目的語を支配すると考えてよからう。それ故、  
Inf.を取る場合には、目的語のうち一方に対格形の名詞句を持ち、他方にInf.を取るのだ  
と解釈し得るものと筆者は考える。そして、Inf.の主語に就ては主文の目的語と同一の  
ものを指すため、省略されたものと解釈される(註3)。

本稿では、主文の目的語とInf.の主語を明確に区別する立場に立ってきた。それに対し、  
所謂Acc. cum Inf.の対格形の句を、主文の目的語でもあり、同時にInf.の主語でもあると  
する分析も考えられる(Wackernagel(1950), etc.)。この分析は、Inf.の補文と主文の境  
界を明確にせず、所謂Acc. cum Inf.の対格形の句の所属を曖昧にしているという理由で、  
退けられよう。

以上の様に、従来のInf.構文の記述では、Acc. cum Inf.の対格形の句の文法機能に関す  
る分析が不十分であると言わざるを得ない。それ故、本稿では、その様な欠点を補う形で  
Inf.構文の記述を行いたい。

## 1. 方法

新約聖書の「マルコ伝」を資料体として、Inf.構文の主動詞の位置に生起し得る動詞、即ちI(nfinitive)T(aking)V(erb)の目録を作成する。次に、各ITVの統語的分布を記述する。この際、Bauer(1971)による統語的記述及び用例等をデータとして用い、本研究の目的に適合する様にまとめ直す。ここでは、前節で述べた様な、構文の成分の範列的關係の分析が殊に重視される。この様にして確立された統語的分布の記述に基づいて、Inf.構文が幾らかの統語的特徴によって幾らかの下位タイプに分類される。

## 2. 調査

### 2.0. ITVの目録

「マルコ伝」中に見いだされるITVは語彙項目としては次の通りである。

- (5) anagkázō:(to force), árkho:(to begin), aphíe:mi(to allow), boúlomai(to want), dído:mi(to give), dokéo:(to seem), dúnamai(to be able), eîpon(said), epaggéllomai(to promise), epilanthánomai(to forget), epitáссо:(to command), epitrépo:(to permit), ze:téo:(to try), thélo:(to want), iskhúo:(to be able), katakríno:(to condemn), légo:(to say), méllo:(to be about), paraggéllo:(to order), parakaléo:(to beg), poiéo:(to make), prolambáno:(to do ahead of time), tolmáo:(to be brave enough), phobéo:(to fear).

### 2.1. ITVの統語的分布

ここでは、Bauer(1971)による統語的記述に基づくITVの統語的分布の調査の過程は、紙面の制限を考慮して省略させて頂く事とし、結果を報告するにとどめたい。詳しくは近松(1989)(注1)にあげられた修士論文)を参照されたい。

さて、その調査結果は次の通りである：

- (6) [ anagkázō (名詞句<sub>[対格]</sub>) 名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / 前置詞句 ]  
(7) [ árkho ( [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]  
(8) [ aphíe:mi 名詞句<sub>[対格]</sub> [人] ( [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / 形容詞句<sub>[対格]</sub> / <sup>(Predv.)</sup> [hína節] ) ]  
(9) [ boúlomai 名詞句<sub>[対格]</sub> [事] / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ]  
(10) [ dído:mi (名詞句<sub>[主格]</sub>) (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [hína節] ) ]

- (11)(a) [ dokéo:<sup>1</sup> (名詞句<sub>[主格]</sub>) <sup>(Predv)</sup>形容詞句<sub>[主格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ]  
 (b) [ dokéo:<sup>2</sup> ([...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [hóti節]) ] <注4>
- (12) [ dúnamai (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (13) [ eîpon (名詞句<sub>[主格]</sub>) [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / 名詞句<sub>[対格]</sub> / [hína節] / [hóti節] ]
- (14) [ epaggéllomai (名詞句<sub>[主格]</sub>) (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (15) [ epilanthánomai 名詞句<sub>[属格/対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / 節<sub>[±関係要綱]</sub> ]
- (16) [ epitáссо: 名詞句<sub>[主格]</sub> 名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ]
- (17) [ epitrépo: (名詞句<sub>[主格]</sub>) ([...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (18) [ ze:téo: 名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [從属節] ]
- (19) [ thélo: 名詞句<sub>[対格]</sub> / 前置詞句 / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [從属節] ]
- (20) [ iskhúo: ([...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (21) [ katakríno: (名詞句<sub>[主格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) 名詞句<sub>[+人] [対格]</sub> ]
- (22) [ légo: (名詞句<sub>[主格]</sub>) (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [hína節/hóti節]) ]
- (23) [ méllo: (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (24) [ paraggélló: (名詞句<sub>[主格]</sub>) (名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] / [hína節]) ]
- (25) [ parakaléo: (名詞句<sub>[対格]</sub>) ([...動詞<sub>[INF]</sub>...] / 名詞句<sub>[属格]</sub> / [從属節]) ]
- (26) [ poiéo: <sup>(Dir. Obj.)</sup> (α名詞句<sub>[対格]</sub> / [関係節] α) (β名詞句<sub>[対格]</sub> / 形容詞句<sub>[対格]</sub> / [hína節] / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] β) ]  
 (但し、βはαに対して述語的な関係がを持つ)
- (27) [ prolambáno: 名詞句<sub>[対格]</sub> / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ]
- (28) [ tolmáo: ([...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]
- (29) [ phobéo: (名詞句<sub>[対格]</sub> [±人] / [...動詞<sub>[INF]</sub>...] ) ]

## 2.2. Inf. 構文の下位タイプ

ここでは、前節で作られたITVの統語的分布に対して幾らかの統語的素性に基づき、分類を施す。

次の様な統語的素性が本研究の目的に關与的であると考えられる。

### 2.2.1. Inf.の統語的役割に関する素性

(30) [±Predv.] : ある名詞句Aに対し、意味の上で ‘A is B’ の関係を持つ辞項Bがある場合、この項Bを述語的(Predicative)であるという事にする。学校英文法における「補語」に相当する。ここでは、述語的なInf.を持つ（即ち、述語的な名詞句・形容詞句と分布を同じくすると考え得るInf.を持つ）構文を[+Predv.]とする。

(31) [±Acc.] : [−Pred.]のInf.を持つ構文においてInf.の項が対格形の名詞句と置換可能であると推定される場合、即ちInf.が対格形の名詞句と分布を同じくしている場合、その構文を[+Acc.]とする。

(30)を立てる事で、述部に生起する項のうち、典型的な目的語と呼べない様な項を区別する事が可能になる。(31)を立てる事により、典型的な目的語を同定しうる。両者を組み合わせる事で、Inf.の統語論的な役割・資格を階層的に表示する事が出来よう。

### 2.2.2. 生起する項の数に関する素性

対格形の名詞句を持つInf.構文において、その対格形の名詞句が主文の目的語であるのか、Inf.の主語であるのかを弁別するためには、主動詞が幾つの項を取るかを考慮する必要がある。それ故、ここで、構文中に生起する項の数に関する素性を導入する事にする。

(32) [±3項] : (主語を含めて) 主動詞が三個の項と共起する構文を[+3項]とする。

### 2.2.3. 述部においてInf.と共起する成分に関する素性

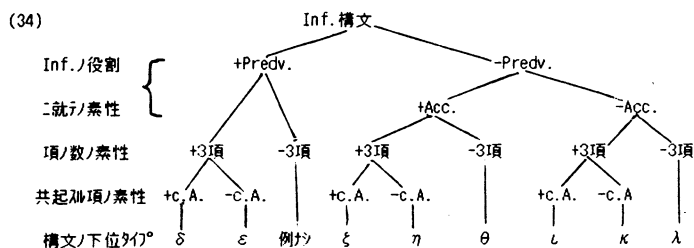
更に、本稿の関心は主文の目的語とInf.の主語を弁別する事だから、[+3項]の場合、述部に生じるInf.以外の項の格について、次の素性を立てねばならない：

(33) [±c.A.] : (Inf.の項を持つ三項構文の述部において) 一つの対格形の項が生起する構文を[+c.A.](with Accusative)とする。[−c.A.]なら、与格の項を持つという事になる。

(33)によって、述部中においてInf.と共起する要素のうち、本研究で特に関心事となっている対格形の名詞句を取り出す事が可能となる。

## 2.2.4. Inf.構文の組織

以上の統語的素性を用いると、Inf.構文は次の様な体系をなしている事が明らかになる。



(34)の終端にあるInf.構文の下位諸タイプは、それぞれの構文の主動詞の位置に生起する語彙項目の任意のものをもって、その構文のタイプを代表させて、次の様に名付ける。

- (35) δ) poiéo:タイプ      ε) dokéo:<sup>1</sup>タイプ      ι) anagkázō:タイプ  
 η) paraggéllo:タイプ      θ) boúlomaiタイプ      ι) parakaléo:タイプ  
 κ) epitrépo:タイプ      λ) tolmáo:タイプ

## 2.2.5. ITVの分類

次に、上に記した様に分類された各構文の主動詞の位置にどのようなITVが立ち得るかをまとめておきたい。

(36) poiéo:-type : poiéo:(to make), aphíe:mi(to allow), etc.

dokéo:<sup>1</sup>-type : dokéo:<sup>1</sup>(to seem), etc.

anagkázō:-type : anagkázō:(to force)

paraggéllo:-type : dído:mi(to give), eîpon(said),

epaggéllomai(to promise), epitáссо:(to command),

légo:(to say), paraggéllo:(to order), etc.

boúlomai-type : boúlomai(to want), dúnamai(to be able), epilanthánomai

(to forget), ze:téo:(to try), thélo:(to want), méllo:

(to be about), prolambáno:(to do ahead of time), phobéo:

(to fear), etc.

parakaléo:-type : katakríno:(to condemn), parakaléo:(to beg), etc.

epitrépo:-type : epitrépo:(to permit), etc.

tolmáo:-type : árkho:(to begin), dokéo:<sup>2</sup>(to think), iskhúo:(to be able),

tolmáo: (to be brave enough), etc.

## 2.2.6. 本記述方式の特色

本記述方式は、所謂Acc.cum Inf.の対格形の名詞句が主動詞に直接に支配されているのかどうかを明示的に表示するよう考案されている。即ち、或る構文が[+c.A.]を持てば、その構文の主動詞は対格形の句を直接に支配している事になる。故に、その構文の中に形作られるAcc.cum Inf.において、対格形の句は主文の要素（目的語）として分析される事になる。そして、それ以外の構文においてAcc.cum Inf.が形作られる場合、その対格形の句は主文の要素ではないのだから、Inf.の主語であると考えねばならない。

次に具体例をあげたい。

parakaléo: (to beg)を主動詞とする文であれば、parakaléo:タイプの構文である事が(36)を参照する事によってわかる。このタイプの構文は(34)及び(35)より、[+c.A.]を持つ。

(37) dià taúte:n oún tè:n aitían parekálesa humás ideín kai  
proslalē:sai, ... (Acts, 28.20.)

「それで、この理由で、会って話しかけるように、あなた達に（私は）求める」(註5)

従って、(37)において、humás「あなた方」(Acc.)が主動詞に直接に支配される目的語である事がわかる。

次に、例えば、boúlomaiを主動詞とする文ならば、boúlomaiタイプの構文である。即ち、この種の文は[+c.A.]を持たない。

(38) mè: boulómenós tinas apolésthai allà pántas eis  
metánoian kho:rê:sai. (2, Peter, 3.9.)

「人が滅びる事をではなく、全員が改心に到る事を望みつつ・・・」(註6)

従って、(38)において、tinas(Acc.)及びpántas(Acc.)はいずれも主文に属さない要素と見なされ、自動的に、それぞれ、Inf.であるapolésthai及びkho:rê:saiの主語として分析される。

以上の様に本稿の記述では、poiéo:タイプ、anagkázō:タイプ、parakaléo:タイプ（いずれも[+c.A.]を持つもの）の構文ならば、Inf.に先行する対格形の句は主動詞の目的語として分析される。そして、その他の構文で、Inf.に先立つ対格の句があるなら、その対格形の句は主文の目的語ではなく、Inf.の主語として分析される。

### 3. 結び

本研究は、Inf. 構文が(34)に見る様な体系を成す事を明らかにし、どのITVがどのタイプの構文に生起し得るかをまとめた。そして、(34)によって、従来Acc.cum Inf.として記述されてきた構文に見られる対格形の句を、主文に所属するものとそうでないもの(即ち、Inf.の主語)とに分析する事が可能になった。

尚、我々の立場ではInf.の主語が省略され得ると考える。この省略については他の機会に論じたい所存である。本稿の構文分類はその省略の研究へ向けてデータを提供する事になろう。

#### 注

(注1)本稿は1989年1月、広島大学文学研究科(言語学)に提出した修士論文『新約聖書ギリシア語におけるInfinitive構文の研究』の内容の一部を要約し、加筆・訂正したものである。

(注2)この例で、tíは疑問詞ではなく、hóstis(whichsoever)の代用と考えられる。尚、この例を検索するに際し、Bauer(1971)を用いた。

(注3)この解釈に関して、Equi NP deletionに似た規則の存在がSmyth(1956)に記されている事を書きそえておく。

(注4)dokéō:<sup>1</sup>とは、ここでは自動詞的用法、dokéō:<sup>2</sup>とは、ここでは他動詞的用法を指す。尚、非人称構文は扱わない。

(注5)この例を検索するに際し、Bauer(1971)を用いた。

(注6)この例を検索するに際し、Bauer(1971)を用いた。

#### 参考文献

- Bauer(1971).Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und übrigen urchristlichen Literatur:Berlin:Walter de Gruyter.
- Blass/Debrunner/Rehkopf(1984):Grammatik des neutestamentlichen Griechisch:Göttingen:Vandenhoeck & Ruprecht.
- Liddell and Scott(1968).A Greek-English Lexicon:Oxford:Oxford at the Clarendon Press.
- \_\_\_\_\_ (1983).A Greek-English Lexicon(Abridged Edition):Oxford:Oxford at the Clarendon Press.
- Noonan(1985).Complementation:Shopen,T.(ed.)(1985)
- Radford(1981).Transformational Syntax:Cambridge:Cambridge University Press.
- Shopen(1985).Language typology and syntactic description Vol.II.(Complex



constructions):Cambridge:Cambridge University Press.

Schwyzzer,E.(1950):Griechische Grammatik zweiter Band.München:C.H.Beck'sche  
Verlagsbuchhandlung.

Smyth(1956).Greek Grammar:Cambridge Massachusetts:Harvard University Press.

Turner(1963):Grammar of New Testament Greek(by James Hope Moulton),Vol.III.Syntax,  
38.George Street, T.&T.Clark,EDINBURGH

#### 使用テキスト

Novum Testamentum Graece(Nestle-Aland):Stuttgart:Deutsche Bibelgesellschaft.1898.  
1979.

Septuaginta:Stuttgart:Deutsche Bibelgesellschaft.1935,1979.

(尚、次の翻訳を参照した)

『新約聖書』(新改訳),日本聖書協会,東京,1981.

『聖書』,日本聖書協会,東京(新約1954,旧約1955)1986.

## Infinitive Construction in New Testament Greek

Akihiko Chikamatsu

The aim of this paper is a syntactic description of the Inf.Construction in New Testament Greek, including the so-called Acc.c.Inf. Many traditional grammarians have confused the subject of the Inf. with the object of the main verb in the Acc.c.Inf.Construction. Therefore I will attempt to clarify the syntactic functions of an accusative phrase in Acc.c.Inf. distinctively in this paper.

The syntactic distributions of the collected 24 I(nf.)T(aking)V(erb)s are described first, and they are classified into 7 lexical classes, which correspond to these types of construction: poiéo:-type, dokéo:-type, anagkázō:-type, paraggéllo:-type, boúloomai-type, parakaléo:-type, epitrépo:-type, and tolmáo:-type.

Of these constructions, those with the syntactic feature [+c.A.](i.e. poiéo:-type, anagkázō:-type, parakaléo:-type) can be considered to have an accusative phrase of the Acc.c.Inf. as an object of the main verb. Then an accusative phrase which is not an object of the main verb(i.e. Subj.of Inf.) can co-occur with the Inf. in other types of constructions.

Thus the Inf.Constructions in N.T.Gr. are described explicitly with respect to the syntactic function of an accusative phrase of the Acc.c.Inf. and the boundary between the Inf.complement and main sentence in this paper.